

森林吸収源インベントリ情報整備事業地域講習会 九州ブロック

開催日：2014年7月24日（木）

場所：熊本県天草市河浦町白木河内（調査地点コード 430020）

講師：大貫・山田（森林総研本所）、酒井（佳）・稲垣・釣田（森林総研九州支所）

○概要

九州及び中国ブロックの現地調査を担当する熊本県森林組合連合（以下熊本県森連）の担当者5名を対象に調査指導を行なった。梅雨明け後の気温が急激に上昇する時期にときおり降る通り雨が重なり、当日は大変蒸し暑い中で講習会が行なわれた。

8時に河浦町運動公園駐車場にて待ち合わせ後、車で5分程度の場所にある調査地点に向かった。対象林分はスギ・ヒノキ人工林とアラカシ・コジイを中心とする広葉樹林であり、傾斜は20-40度程度であった。

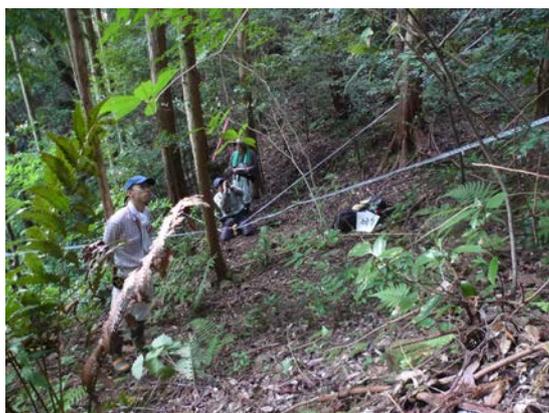
今回ブロック現地調査を担当される熊本県森連は過去2年担当しており、5名中4名が調査経験者だった。そのため、通常の調査手順を行なう中で、講師が気づいた点を指摘する形で講習を行った。中心杭確認～概況調査を全員で行ない、土壌断面調査を3地点同時に開始した。うちW断面の担当者は未経験者であったので断面調査を補助しつつ重点的に指導を行なった。NとS断面は経験者が担当したので手順の確認に重きをおき、堆積有機物を残しすぎない、石礫率が95%を占めていた場合でも少しでも土壌があれば採取するといった本年度新たに喚起した注意点を調査者と確認し合った。経験者は概ね手順通りに調査を行っていたが、調査手順のなかには断面整形の考え方の理解がやや不足する場合もあった。A0層と鈹質土層の境界付近を明瞭にするため、鉛直方向から剪定鋏を用いて整形を丁寧に行う必要性や、有機物の多い表層の土壌を下層に付着すると土層の判定が正しくできなくなるので上方から下方に整形することの必要性を説明した。

午後はW断面の担当者がE断面の調査を行い、他の地点を終了した調査者が枯死木調査を行なった。E断面は、1期の調査結果から石礫率が高いことが予想されたが、今回も表層から小礫が数多く見られた。円筒採取時にやや大きな礫が円筒内に入り作業が進まなくなったため、講師の一人が調査者と交代して礫が多い場合の円筒の調整方法を実演した。礫がある程度の大きさであっても剪定鋏で切断、整形ができることを講師が示した。熊本県森連では過去の調査でブロックサンプリングの必要性が少なかったことから、本講習が礫の多い調査地点での調査法の判断基準になったであろうと思われる。

枯死木調査についても、通常行っている調査体制の作業を行ってもらい、講師が手順を確認した。これまでの調査では①枯死木の探索と測定、②樹種・分解度の判定、及び記録とを分担して二人一組で実施しており、今回もこの担当での作業が行なわれた。記録者が作業者に指示を出しながら作業がスムーズに行われていることを確認した。枯死木のなかには分解が進み一部が土壌に埋まったような

ものがあり、直径巻き尺による測定に時間を要した。また、立枯木には、林冠が混み合っていて葉の様子が一見ただけでは見にくいところで、目視の高さでは樹皮も付いており生立木と見分けが付かないものであっても、地際に腐朽痕が少しあり幹を指で押すと柔らかく材の腐朽がわかるものがあった。枯死しているか判定しにくい場合には、手で材の堅さや樹皮の剥がれやすさもみるように指導した。周囲木の測定について、今回の根株は周囲木に比べて非常に細いものであったので、視界の範囲で比較的細いものを選んで測定するように指導した。すべての調査は16時頃終了した。

講習全般を通して、経験者が行なう調査はほぼ円滑に行なわれていたが、堆積有機物の採取作業では必要以上に時間をとられていることが気になった。礫の混入を防ぐため堆積有機物を手作業で確認しながら回収する作業は、崩積地のような堆積有機物量が集積しやすい調査地点では他の作業項目と比べ作業時間が突出する可能性がある。一つの作業工程に時間を取られすぎないように、礫の存在量に応じた採取の仕方をする必要を感じた。一方、断面整形のところでも述べたような、正確な炭素蓄積量測定を行なうための手順が十分に行なわれていない行程もある。炭素蓄積量測定の精度を保つため、マニュアル上の手順を細部までより良く理解することが重要である。



林分風景



S地点 調査風景



E地点 調査風景



調査終了時